

日本国際ボランティアセンター（JVC）代表に就任した

谷 山 博 史 さん(48)

ひと



きらきらと光りながら、コインが海底に沈んでいく。海沿いのスラムで、日本人観光客が海に硬貨を投げ込んでいた。住民たちが潜って拾うのを、喜んで見ている。

大学院生の頃、初めての海外でフィリピンへ行ったときのことだ。心を痛めつつ、気が付いた。何もしなければ自分も観光客と同じだ――。

あれから20年以上が過ぎ、海外で活動するNGOの草分け、JVCの代表に今月就いた。「不公正を生む社会構造の中に自分も立っている。こ

のジレンマが原点なんです」85年に門をたたいて以来、

カンボジア難民キャンプを始め、多くの現場を踏んだ。この4年間はアフガニスタンに駐在し、診療所や女子学校の支援をした。「9・11を導いた深い絶望は、対テロ戦争では決して救えない」

小学生の頃、清水の次郎長

にあこがれ、仲間と「谷山一家」をつくった。親分肌で、お上に頼らない生き方を目指す点では、今も同じだ。

「NGOの時代」と言われるが、実際は逆風だと感じる。復興と軍事が一体化し、活動の制限が強まっている。政府の途上国援助（ODA）に組み込まれ、国家の下請けになる恐れもある。

「現状がどんなに厳しくても、目前で死んでいく人たちのために見ていることはできない。政府の対応は待てない」待たずに自分で行動する。これがNGOだという。

文 真鍋 弘樹
写真 福留 庸友